第12回ESD大賞
受賞校実践集

主　催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
後　援：文部科学省 / 日本ユネスコ国内委員会 / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 / 株式会社教育新聞社

はじめに

Education for Sustainable Development（ESD）は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育といわれています。

地球上の様々な課題を自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、この ESD の理念に基づく取組を積極的に実践する学校を奨励する「ESD 大賞」を平成 22 年に創設いたしました。

本事業は、全国の ESD の優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。
12 回目となる今年は、全国の小・中・高等学校 25 校よりご応募をいただきました。

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではありましたが、第 12 回 ESD 大賞として、ここに受賞校を発表し、その実践をまとめました。
なお、第 12 回 ESD 大賞の副賞は、カシオ計算機株式会社様にご協力をいただきました。

本冊子が少しでも ESD 実践の参考・発展へとつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

目　次

◆はじめに・・1
◆審査にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
◆講評・・4
◆文部科学大臣賞
渋谷教育学園渋谷中学高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
◆ユネスコスクール最優秀賞
宮城県気仙沼市立鹿折小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
◆小学校賞
福井県勝山市立平泉寺小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
◆中学校賞
茨城県牛久市立おくの義務教育学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
◆高等学校賞
広島県立広島国泰寺高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
◆審査員特別賞
兵庫県立兵庫高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

【審査にあたって】

第 12 回 ESD 大賞の審査にあたっては、ESD の目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うこと」に基づき、審査を行いました。

加えて、

① ESD の目標を実現するための教育活動を組織的・計画的に実践し、その成果を読み取ることができる。

② ESD についての指導内容・方法等に工夫改善され、新しい提言が行われている。

などの観点も重視されています。

なお、「ベスト・アクティビティ賞」とは、学校や地域の特性を生かしたオリジナリティのある活動、他校にも生かせるアイデアに富んだ取組を行う学校を表彰しています。

「スタートアップ賞」はユネスコスクールに加盟して 3 年未満（加盟していない学校含む）の学校を対象とし、優れた実践を行っている学校を表彰しています。

今回惜しくも受賞を逃した学校においても、優れた取組が多くありました。各学校におきましては今後一層精進され、ESD の発展・充実に向けた取組となることを期待しています。

【講評】

手島　利夫

NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、第 12 回 ESD 大賞査委員長

1　文部科学大臣賞（渋谷教育学園渋谷中学高等学校）

日本のユネスコスクールの課題であった国際交流へのお取り組みを中心に、生徒さんたちの情熱と活躍、そして成長が伝わってきました。それは大人によって準備されたものでなく、自分たちが必要性を感じ、様々な課題を乗り越えて主体的に開催され、大きな成果をあげるという素晴らしい実践であり正に、文部科学大臣賞に値するものであります。

2　ユネスコスクール最優秀賞（宮城県気仙沼市立鹿折小学校）

「海と生きる探究活動年間指導計画」等プランニングがしっかりしています。関係機関との関わりも整理され、体験やふれあいを通じた学びの充実につながっていて素晴らしいです。

3　小学校賞（福井県勝山市立平泉寺小学校）

地元の自然環境・社会環境を軸に学びを組み立て、発信の場も工夫することで、子どもたちが社会から評価される道筋まで整えている点で素晴らしいです。

4　中学校賞（茨城県牛久市立おくの義務教育学校）

9 年間を見通し、総合的な学習の時間「ふるさとおくの」を中心に、各学年に特色あるテーマが設定され、地域に開かれた教育課程の中で実践が進められている点で素晴らしいです。

5　高等学校賞（広島県立広島国泰寺高等学校）

「グローバル、課題の発見と解決、イノベーション」の 3 つのキーワードを軸に、全体計画や、緻密な年間計画を立てて実践が進められていて、素晴らしいです。

6　審査員特別賞（兵庫県立兵庫高等学校）

「地域社会の未来を担い世界へ羽ばたく実践者の育成」を目指し、「総合的な探究の時間」を先行実施するなど、意欲的で優れたお取り組みだと思っております。様々な地域機関との連携を踏まえたカリキュラム・マネジメントを工夫され、全校体制で ESD の推進に取り組まれ、生徒さん方の中に社会の一員としての当事者意識や責任感が育まれている点も素晴らしいことと思います。

※今年に関しましては、〈ベスト・アクティビティ賞〉と〈スタートアップ賞〉は
該当なしとなりました。

今年は、新型コロナの問題だけでなく、各学校にタブレットが導入され、その扱い方の研修に多くの時間が割かれ、ご苦労も多かったことと思います。来年度には、それらの機器をも有効に活用し、しかも ESD を通じて学びの本質に挑戦するといった、優れた実践がたくさん集まることも期待しております。

文部科学大臣賞

渋谷教育学園渋谷中学高等学校
教諭　北原隆志

オンライン国際イベント「学びのオリンピック　ＳＯＬＡ 2021」開催
―ＳＤＧｓ達成を担う次世代地球市民の育成を目指して

１　はじめに

2021 年 8 月 17 日、本校はオンライン国際イベント「学びのオリンピック SOLA 2021」(Shibuya Olympiad in Liberal Arts 2021) を開催した。オリンピックが SDGs 達成に必要な「多様性と協働」で成り立っていること、リベラルアーツが SDGs 達成の鍵となる学問であること、「空」が世界を一つに繋げていることから名づけた。教員が決めたのはこの大会名と開催日だけで、それ以外はスローガンや種目の決定、バイリンガルのウェブサイトの構築、要項やポスターの作成と募集、大会の進行など、企画・運営は徹底して生徒が行った。

SOLA のねらいは主に二つだった。一つは、ESD をより効果的に実践するために国内外の学校・企業・教育機関とのネットワークを拡張すること、もう一つは、本校本来の ESD プロセス「知識の習得→解決策立案→行動→発信」の実施である。本校では、教科横断型アクティブ・ラーニング授業、サービス・ラーニング（＝社会貢献活動教育)、研究論文作成を ESD３大柱そして、全学年で SDGs 達成に貢献できる人材を日々育成している。

例えば、昨年度、高１は、社会の授業でカンボジアの問題を解決するビジネスを考案するプロジェクトを、英語の授業で「戦争と平和」をテーマに米国のパートナー校が世界史の授業で使用する教科書を作成するプロジェクトを実施した。このように、コロナ禍でも、アクティブ・ラーニング授業は例年に劣らず充実させることができた。

しかし、校外での社会貢献活動や研究活動、発信については色々と制限があった。従来、生徒たちは他校や地域社会、海外などに赴いていたのだが、それができなかった。Actions, Not Words、これは本校がユネスコスクールに加盟した頃、第１回ユネスコスクール全国大会で発表を行った生徒たちが掲げたスローガンであり、それ以降、生徒たちは 10 年以上に渡ってこれを合言葉に様々な社会貢献活動を行ってきた。コロナに負けて、その火を消してはいけないと開催したのが SOLA だった。結果として、17 ヶ国 100 校が参加するという非常に大規模な社会貢献活動となった。また、17 団体と 40 名のゲストの協力も得られ、国内外の学校関係以外のネットワーク構築にも成功した。

２　実施内容

生徒たちが立ち上げた種目数は 20 であった。リベラルアーツということで内容は科学、数学、地理、歴史、美術など多岐に渡ったが、いずれも SDGs 達成を目指すというコンセプトで企画された。カテゴリーとしては模擬国際会議、コンペティション、プレゼンテーション、プロジェクト、クイズ大会、特別企画の６分野が設けられた。

模擬国際会議部門では、少年兵をテーマとした模擬国連とジェンダー平等をテーマとした模擬Ｇ７サミットが開催され、各国の共通点と相違点を共有した上で問題を明確化し、解決策を案出した。

コンペティション部門のビブリオバトルは、初体験の海外の学校に、その意義と面白さを伝えることができた。同部門のパーラメンタリーディベート大会は、審査委員長として参加していただいた世界的なジャッジの方から高校生がこのように大きな世界大会を成功させたことに感動したというコメントをいただけた。「SOLA 教育ビジネスコンテスト」は唯一他団体企画による種目で、カンボジアの問題を解決するビジネスプロジェクトのパートナーである日本電気株式会社が運営し、本校生徒は発表者として参加した。

プレゼンテーション部門の一つ、「中学生 SDGs Actions, Not Words 2021」は、昨年度、地球社会の問題解決に向けて自分たちが考えて行動するという、総合の時間に行った SDGs 授業の成果を発信する場にしたいと中３生が立ち上げた企画だったが、同様の活動

をしている他校の中学生と情報を共有し、ネットワークを構築するという目的も達成した。同部門の「『気候正義』について考えよう」は京都大学の宇佐美誠教授を招聘してディスカッションを行ったことから発展した種目だった。ディスカッションの後もフィードバックミーティングを何度も繰り返し、今回の開催につなげた。

プロジェクト部門の一つ、「冷戦についての教科書づくり」は、自分たちが作成した資料が米国のパートナー校から最高評価を受けたチームによるもので、今回は各国の意見をまとめた共通の教科書作成に挑戦した。結果は、国によって歴史そのものの捉え方が全く異なっていたため、そこまでに至らなかったが、その違いを認知した上で各国が歩み寄りをする必要性を 11 月に行われた高校生全国フォーラムで訴えていた。同部門の「クリーンリバーから考える環境問題」は、中１から学んできた問題の解決に向けて高校生である自分ができることを考え行動する、高２のサービス・ラーニングから立ち上げられた種目だった。

クイズ大会部門の「クイズ王決定戦」もクイズを楽しむだけではなく、SDGs に関する知識を得られる工夫がなされていた。さらに後日、そのクイズを小学生にも教えるなど、啓蒙活動に励んだ。

特別企画の「脳ラボ！」は学校で開催した脳医学の専門家を招いての講演会に刺激を受けた生徒たちが立ち上げた種目であった。

このように SOLA は本校が提供してきた教育活動の中から、各生徒が興味を持ったものを研究し、そこで得たそれぞれの考えを発信する場であった。

３　成果と課題

各種目の運営生徒にアンケートをとった結果、以下の価値観や資質が育まれたことがわかった。

●授業や特別講座など、学校で学んだことをもとに計画を立て、行動するということを経験したことにより、SDGs 達成には豊富な知識・教養が必要であるということを強く実感した。

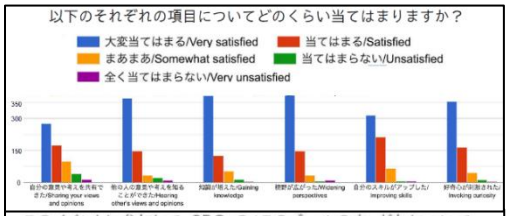
●海外の同世代の人たちと知識の共有・意見交換・解決案の決定を行ったことにより、地球社会が抱える問題解決には、多様性と協働が非常に重要であるという考えを強めた。

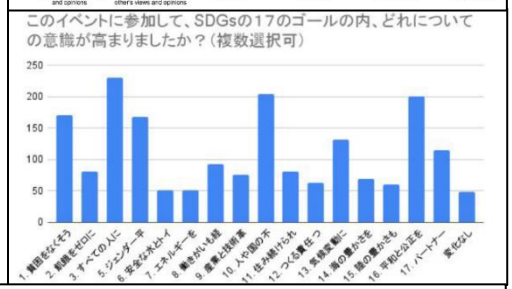
●様々な立場の大人が自分たちの思いに賛同し、行動を評価してくれたことで、中高生でも世界を変えられると思うようになった。

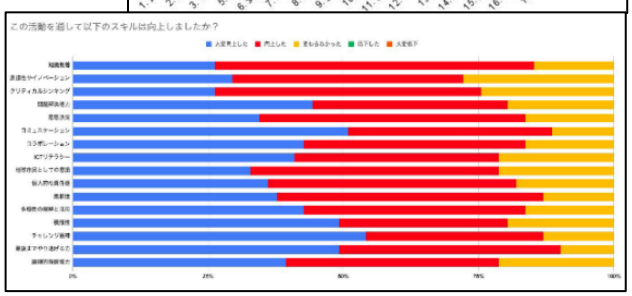
●大会運営を行った生徒は、コミュニケーション能力やリーダーシップ力が向上した。また、海外の教員から高い評価を受けたことにより、グローバルリーダーとしての自信をつけた。

各種目の参加者のアンケートは、大変満足 68.8%、満足 26.7%という結果だった。満足した理由として多かった回答は、視野が広がった、知識が増えた、他の人の意見や考えを聞くことができた、好奇心が刺激されたであった。また、SDGs の 17 のゴールそれぞれに意識が高まったという人が多くいたことも SOLA の成果である。

今後の課題は、SOLA 2021 の成功をゴールとせず、これをきっかけに Action を起こしていくことである。「中学生 SDGs Actions, Not Words」チームは幼稚園児に対する SDGs の啓蒙活動を、「気候正義」チームは「環境」の教科化とアプリのビジネス化を、「教育ビジネスコンテスト」チームはカンボジアでの起業に向けて活動している。SOLA 実行委員の生徒たちは、海外のように日本も若者たちがグローバル問題解決のリーダーとして活躍できる社会になることを願い、中高生の力で大きな国際イベントを開催できたということとその成果をできるだけ多くの人たちに伝えることによってマインドセットを変えようと、積極的に発信を行っている。その点からも今回の ESD 大賞受賞の意義は非常に大きい。







ユネスコスクール最優秀賞

宮城県気仙沼市立鹿折小学校
教諭　千田康太

問いをもち，主体的に学び続ける児童の育成
～海と生きる探究活動・生活科を中心とした横断的・探究的なカリキュラムの活用を通して～

１．はじめに

2004 年度から気仙沼市は、ESD の視点に基づいて総合的な学習の時間のカリキュラムの見直しを進めてきた。豊かな自然を生かした国際環境教育，スローフード運動を背景とした食育，伝統・文化や防災教育など，豊富な地域資源を教材として，各校が特色ある学習活動を創造し，国内の ESD を推進する拠点として実践を積み重ねてきた。

しかし，近年，地球温暖化や東日本大震災等の影響を受けて，以前と異なり多くの課題が見られるようになってきた。気仙沼市の主な産業は水産業だが，近年，サンマの水揚げが著しく減少してしまった。また，海水温の上昇や海洋酸性化によって，牡蠣やワカメの成長が遅れる等，海の生態系のバランスが崩れつつある。様々な要因が複雑に絡み合うこれらの課題と向き合うためには，気仙沼市の水産業や自然をローカルな視点で捉えるだけでは解決することができず，グローバルな視点で他者と協働的に解決していく必要がある。

また，社会に求められる児童の資質・能力も大きく変容している。平成２７年に国際連合で「持続可能な開発のための２０３０アジェンダ」が採択され，国際社会全体の普遍的な目標として「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」が定められた。持続可能な社会を目指していくために，グローバルな視点に立って物事を考え，行動できる人材の育成が急務となっている。また，学習指導要領に，各学校におけるカリキュラム・マネジメントの整備が重要であることが示されている。各教科のねらいや内容への理解を深め，学習の基盤となる資質・能力の定着だけでなく，これからの社会に対応できる「生きた学力」を育むため，探究的で，教科を横断する学習の充実を図る必要がある。

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い，現在も活動が制限されているが，気仙沼市が掲げる震災復興キャッチフレーズ「海と生きる」を実現するために，自然・産業等の豊富なコンテンツをグローバルとローカルの視点で見つめ，どのように児童と「ひと・もの・こと」の本質を出会わせるか。そして，これからの環境に合わせて学びをどのように再構築して，児童の資質・能力の向上につなげるカリキュラムをデザインするか迫りたいと考え，本研究を進めてきた。

２．実践内容

（１）本校のＥＳＤの目標

地域の人と触れ合い，自然・文化・産業に関わりながら，ふるさと気仙沼への思いや考えを深め，自分の考えを表現し，課題解決に向けて協働して活動することができる「持続可能な社会の創り手」としての児童の育成を目指す。

（２）これまでの実践を受けて

①　児童の実態について

これまでの実践を通して，児童は地域の自然や産業・伝統等の特色及び，海とのつながりを理解することができた。しかし，それらの気付きを，教科等の学習で活用し，自ら新たな問いや疑問を見つけるといった段階までには至らなかった。震災後，児童が海や自然の中で遊ぶ環境や，他者と関わる機会が限られてしまい，「ひと・もの・こと」と出会う経験が著しく減少したことが原因ではないかと考える。様々な事象に出会っても物事を深く見つめたり関わったりする経験が不足しているため，疑問や気付きが少なく，思考の深まりが見られない児童が多い。そのような様子は教科学習でも見られ，令和元年度に行われた全国学力学習状況調査では，気仙沼市及び本校の得点率は全国平均値より低い値となった。以上のことから，探究的な学びを通して物事を深く見つつ，考える力を高めていきたいと考えた。

②「海と生きる探究活動」について

本校は，令和２年度から文部科学省指定教育課程特例校（海洋教育）に指定されている。それに伴い，特設領域「海と生きる探究活動」を３年生以上に設定し，様々な視点で物事を見つめ，他者と協働的に関わりながら自己の生き方を探究していく児童の育成に取り組んでいる。特設領域「海と生きる探究活動」は，総合的な学習の時間，国語科，社会科，理科の時数の一部から時間を移行し，学年毎に１つの文脈の中で探究的な学びを深めることができるように教科横断的・融合的カリキュラムをデザインした。また，３年生以上の探究的な活動の基礎を養うために，１・２年生の生活科の単元を自校化し，体験活動を通して「ひと・もの・こと」と出会い，本物に触れる経験から，問いや疑問をもつ児童の力を高めたいと考えた。

③　「鹿折小ＳＤＧｓ１０」について

東日本大震災からの復興・創造を念頭に「鹿折小ＳＤＧｓ１０（図１）」を掲げ，教育活動全体で「共生・共創」社会の実現を目指す資質・能力を育むＥＳＤの推進に努めている。「鹿折小ＳＤＧｓ１０」とは，１７の目標から，重点的に取り組む１０つの目標を設定したものである。身近な資源の価値を人づくりと地域づくりの２つの視点から意味付けし，ストーリー性のある学びの文脈になるようカリキュラムを改善した。それぞれの学年で，天旗・浪板虎舞等の歴史・文化の伝承（３年），鹿折川の水が育む命や人の営み（４年），水産加工や造船等を通した他地域・世界との繋がり（５年），気仙沼が抱える課題と未来を見つめたまちづくり（６年）の活動の価値を「鹿折小ＳＤＧｓ１０」を通して，地域及び大学等の専門機関と共有し，地域に根ざしながらも，世界的な視点に立った体験的・探究的な学習を展開し，思考・行動の変容を目指している。

図１　鹿折小「ＳＤＧｓ１０」

④教科横断的・融合的に学ぶカリキュラムデザイン

３年生以上の学年で実施する特設領域「海と生きる探究活動」については，移行した教科・領域を融合した活動を目指すと共に，その他の教科・領域を横断的に学ぶことができるようにカリキュラムをデザインした。それぞれの活動内容・目的等をデザインシート（図２）にまとめ，関連教科・内容，児童に身に付けさせたい力を年間指導計画（図３）に整理した。デザインシートについては，１年間の活動を３つのステージ（第一次探究・第二次探究・第三次探究）に分け，それぞれのステージ内で，①問いをもつ，②課題の設定，③情報の収集・分析・整理，④まとめ・発信，⑤振り返り・考えの更新という思考のスパイラルができるように配慮している。

図２「海と生きる探究活動」のデザインシート

年間指導計画については，移行した教科・領域の学習内容を融合して，一つの文脈の中で児童が効果的に学ぶことができるように時数や内容を整理すると共に，その他の教科・領域とどのように関連するのかを年間指導計画に明確に位置付けた。関連させる意図・効果として①強化，②付加，③補完，の３つに分けて設定し，児童の学習内容が横断的・融合的に深まるように工夫した。

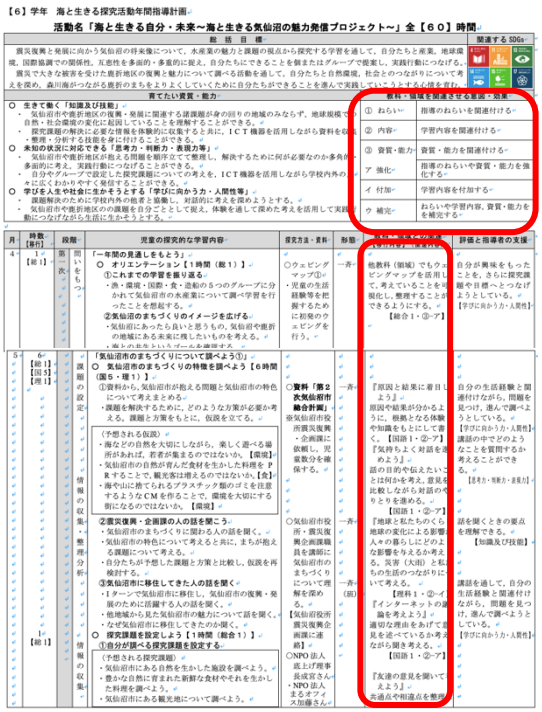


図３「海と生きる探究活動」の年間指導計

（３）各学年の取り組み

各学年でテーマを設定し，それぞれが以下の４点について留意しながら活動を進めている。

①五感を活用して身近な自然や人とふれあう活動
②地域素材でつながる協働ネットワーク
③教科・領域を横断的に学び、考えを深める活動
④世界と自分（気仙沼）をつなぐ活動

その中でも顕著な例を紹介していきたい。

〈生活科・海と生きる探究活動における主な取り組み〉

	テーマ	活動内容	
1年	ししおりのしき（生活科）	岩井崎磯遊び（親子行事） 大島砂の造形遊び （大島小学校との交流）	
2年	どきどき町探検（生活科）	町探検「かもめ通り」 舞根森里海研究所生き物調査	
3年	鹿折の宝 ～自然・文化～	天旗まつり・白山小唄（伝統・文化） ワカメ種挟み・養殖体験	
4年	山・川・海の生命をつなぐ鹿折川	鹿折川生物調査・保全活動 稲作り体験	
5年	世界につながるぼくらの海郷学	個人探究活動	魚市場・造船所見学 マグロ延縄船乗船体験 水産加工場見学・地球温暖化
6年	海で復興「気仙沼の魅力」発信プロジェクト	個人探究活動	スローフード学習（オリジナルレシピづくり） まちづくり
全校	若草児童会活動・縦割り植栽活動 海のフォーラム（学習発表会・リモート発表）		

① 五感を活用して身近な自然や人とふれあう活動

低学年は，五感を使いながら地域の生き物や人と触れ合う活動を重視したカリキュラムを構成した。２年生は舞根森里海研究所で海の生き物調査を行い（写真１・２），生き物の形・色・身の守り方など様々な特徴を捉える活動に取り組んだ。気仙沼の海に生息するウミウシを観察する際に，紫色の体液を放出する場面があった。児童から，「なぜ紫色の液体を出すのかな。隠れるためかな。」といったつぶやきが聞かれるなど，実体験を通して生き物に対する興味を高めることができた。また，海での体験を通して気付いたことは，音楽や図画工作科等の教科の指導でも生かしている。「海」の替え歌を作ったり，紙粘土の作品を作成したりしながら，自分の考えを多様な方法で表現できるように活動し，教科・領域を横断的に学ぶ素地を養うことができた。

写真２舞根森里海研究所発表会の様子

② 地域素材でつながる協働ネットワーク

気仙沼市内でも鹿折地区は多種多様な地域素材（自然・人・文化・産業）が豊富にある地域である。鹿折川が学校のすぐ側を流れ，その水は気仙沼湾に注ぐ。その流域に住む人々は自然の恩恵を受けながら，豊かな環境・地形を生かし農業や養殖業を営んでいる。その暮らしは気仙沼の生活・文化・伝統に影響を与え，大切に受け継がれてきた。そのような地域の宝をテーマに，３年生は「天旗まつり」「浪板虎舞」「わかめの養殖業」について保存会や漁師の方から話を聞き，実際に体験することで気仙沼の人々が大切にしてきた思いやその価値について考えることができた。

写真３　天旗祭り・連凧作りの様子

４年生は，鹿折川の生き物調査，稲作り体験を通して，「命を育む水」をテーマに探究的な活動に取り組んだ。鹿折川に流れる豊富な水が育む生き物を宮城教育大学の棟方准教授と共に調査する活動を通して多様な課題を見つけることができた。指標生物を基に水質汚染について考えたり，プラスチックゴミを発見し，自分たちにできることを話し合ったりすることもできた。地域の川を大切にする価値について一人一人が当事者意識をもって考え，稲作り農家を助ける思いを込めてカカシを作り，農家の方にプレゼントすることができた。

③ 教科・領域を横断的に学び，考えを深める活動

写真４
稲作り体験と
カカシ作りの様子

５学年では，「世界とつながる僕らの海郷学」というテーマで気仙沼市の水産業の課題を見つめる学習に取り組んだ。魚市場や漁業を支える造船業を見学すると共に，「海と生きる探究活動」へ移行した社会科や理科の単元（「水産業の盛んな地域」の一部）と関連させながら，児童の知識・思考力を往還的に高めていくことを目指した。活動の中で，「なぜ潮目

に魚が集まるのか。」という児童の疑問を，実験を通して理解する学習があった。児童は理科で「もののあたたまり方（４年生）」について学んだことを想起し，海水も温まると体積が大きくなって上にいき，温度の違いが対流を生むことを考えることができた。さらに，暖流と寒流の対流の違い，成層強化や海水温の上昇によって生態系へ影響を与えることなど様々な課題へと発展させることができた。教科で学んだことを探究活動の中で活用することは，教科を学ぶ価値を児童に与え，身の回りの様々な事象を考える習慣付けにつながる。

６学年では，「海で復興『気仙沼の魅力』発信プロジェクト」というテーマで，前年度まで学んできた伝統・環境・産業について振り返り，気仙沼市のまちづくり・復興について考える取り組みを行った。気仙沼市は日本で初めてスローフード都市宣言（２００３年）を行った都市でもあり，食文化や調理法等に着目し，オリジナルレシピ作りに取り組んだ。

写真５　修学旅行・オリジナルレシピ試食会

気仙沼の食材や料理に込められた思いなどを考える活動に加え，修学旅行で訪れる会津若松市の山際食彩工房の山際博美シェフとリモートでつなぎ，他地域（内陸地）からの視点で気仙沼の食材を考える学習を設定した。修学旅行で訪れた際には，山際シェフが調理したオリジナルレシピの試食会や，会津若松の伝統料理「わっぱ飯」「こづゆ」を食べることで，海と山それぞれの食材の良さにふれ，多様性について考えを広げることができた。

また，高学年では，調査活動を通して学んだことを個人毎に分析，発信する「個人探究活動」をカリキュラムに設定した。一人一人が探究課題を設定し，タブレットでスライドを作成して「海洋サミット」，「鹿折海洋フォーラム」で他地域に発信することができた。探究課題について分析・整理・発信する際には，主に国語科で学んだこと活用し，自分の意見に説得力をもたせるために文の構成を整える力を高めることができた。

写真６　鹿折海洋フォーラムの様子

④　世界と自分(気仙沼)をつなぐ地域素材

活動を進めていくと，地域の課題とグローバルな課題がつながっている事象と出会った。特に地球温暖化の課題については，身の回りの活動だけでは実態が見えづらいことから，仙台市ユネスコ協会の内藤惠子さんと日本キリバス協会のケンタロ・オノさんの協力を得て，海面上昇で海に沈む恐れのあるキリバス共和国の小学生との交流会を設定した。キリバス共和国の小学生が話す，地球温暖化の影響やそのことに対する不安，将来に残したい豊かな文化を聞き，自分たちにできることがないか考え行動しようとする児童が多く見られた。

写真７
キリバス共和国との交流会

３．成果と課題

活動を通して，児童は身近な地域の環境や産業，グローバルな課題への理解を深めた。また，それら相互及び自己とのつながりへの関心を高めただけでなく，体験活動や探究的な学習の楽しさと有意味性を実感することができた。自ら「問い」をもち，主体的に学びに向かう姿が随所に見られるようになり，貧困国や豪雨災害地域へ向けて自ら募金・支援活動を行ったり，地球温暖化の世界的な影響を受けて給食の残食を減少させる活動や花いっぱい運動などに取り組んだりと，自分たちにできることを周囲に働きかけながら協働で取り組む児童が増加した。

写真８　児童の自主的・協働的な活動（募金・植樹）

また，実践を通してつながりをもった地域企業や大学等，ステークホルダーとの協働体制は次第に充実しており，他地域にはない連携の体制ができつつある。人口の減少が喫緊の課題となる気仙沼市，労働力不足・後継者不足の課題を抱える水産企業と課題を共有すると共に，海でつながる人と協働して，地域の子供を育もうとする現在の状況は，本市が目指す，気仙沼市教育大綱が基本理念として掲げるＦ・Ｉ・Ｓ・Ｈの力（コンピテンシー）が少しずつではあるが着実に育まれていることを実感している。

小学校賞

福井県勝山市立平泉寺小学校
校長　道関実代子

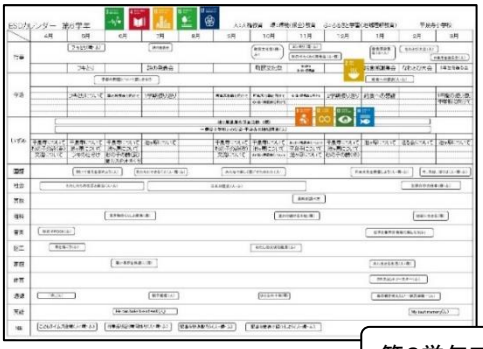
平泉寺の魅力発見・発信！～杉の子ふるさと発信隊～

１　はじめに

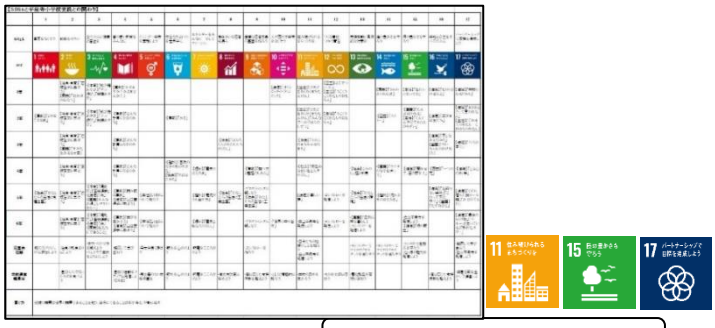
全校児童４５名、教職員１０名の本校は、ジオパークに認定されている勝山市の北東部の高台に位置している。校区には約１３００年前に泰澄大師によって開かれた日本遺産の白山平泉寺があり、そこにある泰澄大師が植えたとされる杉の木は御神木とされ、杉は本校のシンボルマークとして古くから親しまれている。また、校区には希少生物が多数生息する池ヶ原湿原などもあり、平泉寺全体がジオパークとして認定され、児童は身近な自然や歴史に親しみながら生活している。平成２６年度からユネスコスクールの認定を受け、ESD カレンダーを各学年作成し、SDG s の目標に関連づけて教育活動を展開している。

本校の ESD テーマは「平泉寺の魅力発見・発信！」である。５０年後に消滅する可能性があるといわれているふるさとではあるが、どの児童も大人になっても住み続けたいと願っている。そのため、「杉の子ふるさと発信隊」として活動を全校体制で取り組んでいる。

自分たちの活動を家庭や地域、市に『発信』する活動を取り入れ、思考力・判断力を高め、つながりを大切にして自分の思いを発信できる児童の育成のため、ＮＩＥ実践を積極的に推進した活動展開をしている。



第6学年ESDカレンダー



平泉寺小学校SDGs関連表

２　実践内容

（１）白山平泉寺の語り部活動

本校近くにある、国指定遺跡である平泉寺白山神社は、１３００年前に白山を開山した泰澄によって創建された山岳寺院で、中世には国内最大級の宗教都市が形成された。現在でも国内最大級の石畳道や坊院の石垣が境内に残っており、２０１９年に日本遺産に認定された。子どもたちは、同じく石文化でつながり、日本遺産に認定された朝倉氏遺跡のある一乗小学校との交流を行い、互いに歴史ある名所を自分たちで案内し、さらには観光客にも自分たちで魅力を伝えたい、と願うようになった。

そこでまず一乗小学校の児童が朝倉氏遺跡でガイドしている様子を学び、どのように魅力を伝えるといいか考えるきっかけとした。その後遠隔学習で交流も行い、自分たちの平泉寺を案内する意欲を高めることにつながった。

市史蹟・文化課の学芸員の方の協力を得て、白山平泉寺歴史探遊館「まほろば」で平泉寺の歴史を学習したり、実際に境内を案内していただいたりしてガイドの準備を進め、「もう一度訪れたい」「平泉寺にはこんな魅力があるんだ」と訪れた人たちに思ってもらえるように活動を展開した。

活動を進めていく中で、白山平泉寺は魅力ある歴史スポットであり、自分たちの身近な所に素晴らしい名所があることに改めて気づくことができた。

ガイド当日には一人一人が市の補助事業を活用して制作したオリジナル法被や幟旗を使用してガイドを行い、白山平泉寺の魅力を堂々と発信することができた。

また、さらに多くの人にガイドを行いたいと意欲を高めた。これらの活動が市の広報紙にも大きく取り上げられ、多くの方に知っていただくことができ、子どもたち一人一人にも達成感と自己肯定感を高めることができた。

この活動を周囲に発信したことで、地域住民や保護者からも「自分たちにもガイドをしてほしい」という

要望をいただき、公民館の協力も得て、活動を行うことができた。実際にガイドを受けた参加者の方からは、「長年住んでいるけれど、知らなかったことをたくさん知ることができた。」「これからも続けてほしい！応援しています」といった声をいただくことができ、地域とのつながりを深めることができたとともに、子どもたちの今後へのやる気にもつながった。また、日本遺産でつながる小浜市の小学校が白山平泉寺を修学旅行で訪れ、その際にもガイドした。さらに、一般観光客にもガイドする機会をいただき、ガイドを通してふるさとの魅力を発信することができた。

地元住民をガイドする平泉寺小の児童＝6月30日、勝山市平泉寺町平泉寺

「白山平泉寺」案内任せて

勝山 地元児童20人が挑戦

勝山市平泉寺小の4～6年生20人が6月30日、同市平泉寺町平泉寺の国史跡「白山平泉寺」で、地元住民や保護者らを対象に、史跡の歴史などを紹介しながら見どころを案内した。

児童は郷土学習で白山平泉寺について学んでおり、観光客のガイド役を務めることを目標にしている。今回は、地元住民らでつくる「平泉寺地区かつやま子応援ネットワーク」が、児童にガイドの練習機会を提供するとともに、地域にも史跡の魅力を広く知ってもらおうと企画した。

児童は手作りの資料を使いながら、石垣が特徴的な「南谷三千六百坊跡」など、石垣について「歩きやすいように、滑らかな川の石を使っている」などと紹介した。中には、通りがかりの観光客をガイドする児童もいた。

参加者の一人は「子どもたちはよく覚えたと思う。知らないことがいっぱいあった」と感心しきり。6年の大林慶太君(11)は「いろんな人にもっと地域のことを知ってもらいたい」と話していた。（桂知之）

R3.7.1福井新聞

この活動と並行して、平泉寺に来た方に持って帰っていただけるような平泉寺みやげをつくろうと、市の補助事業を活用して平泉寺の苔と石文化の石を組み合わせたグッズ「平泉寺コケリウム」の開発にも取り組んだ。平泉寺コケリウムは一つ一つ手作りで行い、できあがった完成品を一乗小学校の児童をはじめ、まほろばや、恐竜博物館にもプレゼントしたり、市長にも直接手渡ししたりするなどして白山平泉寺の PR に努めている。さらに、市の補助事業を活用し、地域の宝である白山平泉寺をデザインした PR エコバッグを製作し、多くの方々に発信している。

（２）池ヶ原湿原の環境保全活動

校区にある池ヶ原湿原は、古くから「葦田」と呼ばれ、萱葺き屋根や雪囲いの材料として、毎年、地元の人々の手によってヨシ刈りが行われてきた。江戸時代には勝山藩主が菖蒲の花見をする地としたという記録もある。また、ミズチドリやカキランなどの湿原植物が生え、エゾイトトンボやアキアカネなど多くのトンボ等の昆虫が生息する豊かな湿地である。しかし、時代の変化とともに、ヨシの需要が減り、ヨシ刈りが行われなくなった。湿原はヨシが多く生えるようになり、湿地内の希少な植物は次第に少なくなっていった。

＜実践１　ヨシ刈り（全学年）＞

R3.10.30 福井新聞

池ケ原の植物守ろう

みんなで頑ろう

勝山 平泉寺小児童がヨシ刈り

希少な植物の発育を妨げるヨシの刈り取りを行った。全校児童らが参加し、教員や保護者らが参加し、環境保全に汗を流した。

ヨシ刈りに汗を流す平泉寺小の児童＝29日、勝山市の池ケ原湿原

勝山市平泉寺小は29日、校区内の池ケ原湿原で、希少な植物の発育を妨げるヨシの刈り取りを行った。全校児童らが参加し、教員や保護者らが参加し、環境保全に汗を流した。

ヨシは背丈が高いため、他の植物に十分な日光が当たらず、それらの生長を妨げている。その植物の中にはミズチドリやカキランなどの希少植物もある。それらも含めた生態系を守るために、本校では全校児童で秋にヨシ刈りを行っている。児童だけの力では限界があるため、保護者や地域の方、県自然保護センターや市にも協力を依頼し継続して取り組んでいる。

＜実践２　水生動物の捕獲・観察（１～４年生）＞

年間を通して自然保護センターの指導のもと、水生動物の捕獲・観察を行った。環境省の準絶滅危惧種である「アカハライモリ」や福井県で減少傾向にある「オオコオイムシ」などを観察することができ、豊かな自然が残っていることを確認できた。

R3.7.15 福井新聞

池ケ原湿原の動植物を調査

勝山・平泉寺小

勝山市立平泉寺小は14日、校区内にある池ケ原湿原の保全活動の一環で、同湿原で植物や昆虫などの生息状況を調べる活動に取り組んだ。

全校児童約50人が参加。県自然保護センターの職員らのアドバイスを受けて1～4年生は昆虫などの動物、5、6年生は水質と植物について観察したり、生息数を調べたりした。

1～4年生はチョウやトンボを見つけると「いた、いた」とはしゃぎ、網で捕まえていた。湿原の豊かな自然を体感し、3年の平林茂鷹君(9)は「ここが都会のように虫がいなくなったら嫌だ。ずっとこのままであってほしいと思う」と話した。（桂知之）

昆虫などを網で捕まえる勝山市平泉寺小の児童＝14日、同市の池ケ原湿原

夏場になると、春先に比べて捕獲できた水生生物の個体数は増えており、水生生物が豊かな自然のもと、活発に活動していることがわかった。また、見つけた生き物は生き物図鑑に掲載するためにまとめておくようにした。

＜実践３　水生植物の個体数調査および水質調査（５・６年生）＞

５・６年生は、湿原に生息する水生植物の個体数調査を行っている。ミズチドリ、カキラン、ノカンゾウなどの希少植物の個体数の経年変化や生息域の水質を継続して調査することで、池ヶ原湿原の環境が改善され、その状態を維持されていることを知ることができた。観察の際、ゴミが落ちていることにも気づき、美しい自然を残すために自分たちができることをしようとポスターを作成し、掲示した。

＜実践４　ヨシストロー制作でさらなる地球環境改善を（３～６年生）＞

ヨシ刈りで刈ったヨシは、これまでよしずを編んだりして再利用していたが、最近ではよしずを作ることができる地域の方も減った。そこでもっとヨシを有効に活用できないか考えた。自然保護センターの方と有効策を考えたところ、古代メソポタミアでは、アシをストローにしてビールを飲んでいたことを知った。さらに、福井の海岸沿いにあるゴミの分別をしたときにプラスチックごみが大量にあること、そのゴミで海洋汚染がおこり、動物たちの命も脅かされていること、さらには自分たち人間にも巡り巡って被害が出ていることを学んだ。そこで、少しでもプラスチックごみ問題を改善するために、刈ったヨシでヨシストローを作り、周囲に発信し、環境保全を訴えようと考えた。

ヨシストローの長所は、自然に優しいことに加え、湿原に毎年生えるため、材料が無限にある、ということである。さらに繰り返し洗えば何度でも使える、という点も挙げられる。製作工程としてまずは、冬の間乾燥させたヨシを２０ｃｍほどの長さに切り、中にある綿状のものをモールなどで取り去る。次に切った両端をヤスリで磨く（ストローを口に入れたときに切れないようにするため）。最後に熱湯で数分煮沸し、乾燥させればできあがりである。すべて手作業であり、１本のヨシから作ることができるヨシストローは１、２本。ヨシを切る時が一番大変で少しでも油断するとささくれができてしまったり、折れてしまったりする。

完成した２００本を池ヶ原湿原に最も近いレストラン「ミルク工房」に進呈した。またヨシを材料にしたヨシクラフトも制作し、同時に店に飾っていただいた。

山口先輩 ファイト！
母校の勝山・平泉寺小
元気もらえるプレー期待

R3.6.30 福井新聞

これまで、修学旅行先でヨシストローを外国の方に発信してきた。完成品は、市長にも直接手渡し、環境保全を訴えることができた。さらには、本校の卒業生である女子バドミントンオリンピック代表の山口茜選手にも進呈した。

ヨシクラフト

山口茜選手にも贈呈

これらの取り組みは報道でも大きく取り上げられた。その結果、他市でヨシを再利用について思案されている方がヨシストローについて学びたいと本校に赴いた。その際は、児童がヨシストローについて自分たちの言葉でしっかりと伝え、満足げな表情をしていた。この機会を通し、発信することの大切さを改めて感じ取ることができた。さらに、池ヶ原湿原での取り組みを知りたいと市内のユネスコスクールからの要望があった。児童はこれまでの取り組みを堂々と伝えることができ、発信することで周囲への理解や協力を得ることができることを学び、今後も続けていきたいと考えるようになった。

市内ユネスコスクールとの交流

３　成果と課題

これまでの活動のまとめとして、５・６年生が県主催「地域の宝」年表コンテストに白山平泉寺や池ヶ原湿原をテーマに作品を制作し応募したところ、白山平泉寺の作品が県最優秀である知事賞を、池ヶ原湿原の作品が第２位の賞を受賞した。このことは、自分たちの活動が意義あるものであったと再確認できたとともに多くの方に地域の魅力を発信できたいい機会にもなった。

「地域の宝」年表コンテスト知事賞入賞「白山平泉寺１３００年の歴史」

全校児童にアンケートを行った。項目は、「平泉寺が好きか」「大人になっても平泉寺に住みたいか」そして、「将来平泉寺の役に立ちたいか」の３つである。すると、９割の児童が、「自然が多い」「人がいい」という理由で「好き」と答え、７割の児童が「大人になっても平泉寺に住みたい」と答えている。さらに、８割の児童が「将来、平泉寺の役に立ちたい」と考えている。

全ての活動写真を SDG s と関連させて廊下に掲示。

「大人になってもたくさんの生き物を大切にしたい」「自分が有名になって平泉寺をＰＲしたい」「これまで学習して平泉寺について学べたから」という考えが多く見られた。高学年になるほど、すべての項目について肯定的に答える児童が多かった。彼らは本学習の中心となって取り組み、様々な活動によりこれまでには得られなかった貴重な体験を重ねてきており、その成果であると考えられる。

NIE を一つの発信の手段として自分たちの活動を伝えていくことで、それらに共感し、応援してくれる人たちが増えることを体感することができ、さらなる意欲を持つことができた。さらにそれは子どもたちの思いを発信するスキルの向上にもつながり、自己肯定感の向上にも寄与した。ふるさと平泉寺への愛を一層育んだ子どもたちに、今後もＳＤＧｓの視点を通し様々な角度から物事を見つめ、考えを深めていけるスキルを身につけさせていきたい。大人になっても、ふるさとにはこんな魅力がある！と自分の言葉で発信し、自分のスタイルでふるさとを盛り上げていける子ども達に成長してほしい。それが様々なＳＤＧｓの目標の達成につながる新たな考え方や突破力、行動を生み出すことにつながり、ひいてはふるさと平泉寺を新たな視点により創造し盛り上げていくことができる持続可能な社会の担い手となるはずである。

水上市長（手前）に年表にまとめた内容などをモニターで紹介する「チーム平泉寺」の児童＝９日、勝山市役所

地域の宝 発信続けるぞ

みんなで……読もう

県「年表」審査で入賞 勝山の２小学校

児童、市長に受賞報告

地域の歴史などを調べて年表作品にする県教委の「県小学生『地域の宝』年表コンテスト」（福井新聞社後援）のグループの部で知事賞などに輝いた勝山市平泉寺小、三室小の児童が９日、市役所に水上実夫市長らを訪ねて受賞を報告した。

入賞したのは平泉寺小５、６年の14人と三室小３年の５人の計19人。平泉寺小は３グループで、最高賞の知事賞と、県子ども会育成連合会長賞、福井新聞社賞をそれぞれ受賞した。三室小のグループは福井新聞社賞を受けた。

４グループはそれぞれの作品を説明。このうち知事賞を受けた「チーム平泉寺」の手塚朕花さん（12）＝６年＝ら４人は、白山平泉寺の１３００年の歴史をまとめた年表に加え、福井市一乗小の児童を現地へ案内したことなどを紹介し「これからも平泉寺を発信する活動を続けたい」と抱負を語った。水上市長は「力を合わせ一つの作品を作ったことは素晴らしいと思う」などと子どもたちをたたえた。（桂知之）

R3.3.11 福井新聞

中学校賞

茨城県牛久市立おくの義務教学校
教務主任　土居千春

「地域と共に子どもを育てる」地域と連携した学校づくりを目指して
―「Think globally, Act locally」の理念に基づく総合的な学習の時間を柱としたESD･SDGｓの取組を通して―

1　はじめに

本校がある地域「おくの」は、自然豊かで、歴史のある地域である。そして本校は、コミュニティ・スクールとして、学校運営協議会を中心とした地域に支えられている。この恵まれた自然環境と地域人材を活かし、地域と共に本校の子供たちを育てることを核としESDを推進することで、本校児童生徒の育成したい８つの資質・能力(資料２)を高め，持続可能な社会の創り手を育成することをねらいとしている。

（1）「総合的な学習の時間」における単元「ふるさとおくの」を柱としたESD

本校は義務教育学校であり、総合的な学習の時間を柱とした９年間の系統的なESDの推進を重点に置き、教育活動を進めている。そして、その中心単元が「ふるさとおくの」であり、その活動の中で特に大事にしているのが「Think globally,Act locally」の理念である。前期課程１・２年では自然体験を、３・４年では自然への気付きを大切にし、５年からは海外の学校との交流を通して、地球規模の問題について考えたり、自分の国や地域と比較したりして、視野を広げていく。そして後期課程７年からは、自分たちの住む地域おくのへと視点を戻し、大切なおくのの課題を見出し、地域の一員として何ができるのか考え、行動へと移していく。これら一連の活動を通して、児童生徒の資質・能力を高め、将来このおくのを支え、おくのに貢献し、さらには持続可能な社会の創り手の育成へとつなげていくことを目指した。

（2）「つなぐ」を大切にした学校教育全体に広がるESD

本校は、ユネスコスクールであった小・中学校が統合し、義務教育学校として令和２年度に開校した。９年間のカリキュラムを系統的なESDの柱で１本太くつなぎ、効果的なカリキュラム・マネジメントを学校全体で意識して行った。同時に、教職員だけでなく、学校運営協議会を中心とした地域の人的・物的資源とのつながりを大切にしていくことで、一層の児童生徒の資質･能力の向上を目指した。そして、委員会活動や学校行事など、さまざまな教育活動へとつなげていくことで、本校の教育活動全体にESDが広がり、根付いていくことを目指した。

2　実践内容

（1）「地域と共に子どもを育てる」、地域に支えられたESD

本校は、ユネスコスクールとしてESDの推進をグランドデザインの重点項目として掲げ、それを総合的な学習の時間を中心とした教育活動に位置づけて取り組んでいる。その多くの教育活動は、年間を通して多岐に渡っており、学校運営協議会をはじめ地域による人的・物的支援に支えられている。しかし、それらの多くがイベント的・単発的なものであり、児童生徒の資質・能力を確実に高めていくためには、地域の方達にも本校の「ESD推進のねらいの理解・共有が重要」であるとして、令和２年度末の学校運営協議会で、令和３年度の教育活動に向けて改善を図った。手立てとして、学校長が「共に子どもを育てていきたい」とビジョンや思いを伝え、その後、教頭が資料１のように、全学年の視覚的カリキュラム表の説明を行い、各学年の教育活動の共有を行った。その後、「子どもにどんな力をつけさせたいのか」と各学年主任と地域の方と令和３年度に向けた人的・物的体制について話し合いが行われた。

資料１　学校運営協議会で各学年の視覚的カリキュラム表の共有を行っている場面

（２）本校児童生徒に育成したい資質・能力

本校のESDの推進において、目指す児童生徒像は、「おくのを知り、おくのに貢献する児童生徒」（本校グランドデザインより）である。そして、その具現化のために、資料２に示した「育成したい８つの資質・能力」を高めていきたいと考えている。それを実現するためには、資料３に示したように、９年間の系統的な総合的な学習の時間を中心とした各学年の教育活動の中で、それらの８つの資質・能力が発達段階に合わせて段階的に身に付いていくように、学校全体で取り組んでいる。

本校が育てたい資質・能力
①美しいものや崇高なものに素直に感動する力
②批判的に考える力
③未来像を予測して計画を立てる力
④多面的・総合的に考える力
⑤コミュニケーションを行う力
⑥他者と協力する態度
⑦つながりを尊重する態度
⑧進んで参加する態度

資料２　育成したい８つの資質・能力

地域と連携して進める生活科・総合的な学習の時間

学年	テーマ		ねらい	育ていた資質・能力
1年	触れる	自然と遊ぶ	自然に触れ、様々な気付きをもつ	① ⑧
2年		自然を実感する		① ⑤ ⑧
3年	気付く	自然を知ろう	生き物と環境の関係に気付く	① ⑤ ⑥ ⑧
4年		環境と生き物	様々な関連性，つながりに気付く	② ⑤ ⑥ ⑧
5年	考える	地球の暮らし	持続可能なくらしについて考える	② ④ ⑦ ⑧
6年	共有	地球の未来予想図	課題を地域と共有、提案	② ③ ④ ⑦ ⑧
7年		地域に学ぶ	海外の学校との交流で視野を広げる	ALL
8年	協働	地域とつながる	地域社会との協働	ALL
9年	共生	地域に貢献	持続可能な社会の担い手の育成	ALL

資料３　総合的な学習の時間における９年間の系統的なテーマと育成したい８つの資質・能力

（３）各学年のESD取組の実践の一例

ここでは、総合的な学習の時間の中心単元「ふるさとおくの」、そして「Think globally,Act locally」の理念に基づく９年間の系統的な学習活動の実践の一部を紹介する。育成したい児童生徒の力を高めていくための教育活動における実践は、教職員だけでなく、地域の方達の意識も高まっており、カリキュラム・マネジメントの視点からの取組も増え、多岐に渡っている。

①前期課程１、2年･･･おくのの自然を感じる

【２年生　生活科　「森探検」】

本校のESDのスタートとして、本校や地域の人々が「おくのの森」と呼んでいるやまゆりの林の探検を行っている。２年生は森へ入り、植物を調べたり、鳥の声を聞いたりして、自然の中でのたくさんの発見を通して、「おくの」の自然を十分に感じた。その後、森での実体験を、視覚的カリキュラム表をもとにカリキュラム・マネジメントの視点から、国語や図工をはじめとした他教科への学習活動へと広げていった。

②前期課程3、4年･･･身のまわりの自然への気付き、様々な関連性、SDGｓの基礎的な学習

【４年生　総合的な学習の時間　世界や日本の問題を知ろう！（SDGs 17の目標の学習）】

SDGｓ17の目標の表示をもとに、世界や日本の問題についての学習を行った。学習を通して、日本や世界には、様々な問題があることを知った。ある児童の「〇番の問題が解決すると、□番の問題も良くなるかな？」というつぶやきに、他の児童から「△番の問題も良くなるのでは？」という発言が出た。さらに「(これらの問題は) つながっているんだね。」「本当だ。」と友達同士の考えが、つながり広がっていく瞬間が見られた。学校全体でのESD推進の素地があるからこその、子ども達の思考のつながり、広がりが見られた一例である。その後、SDGｓのすごろくゲームを通して、17の目標に慣れ親しんでいた。

③前期課程５、６年･･･地域のくらし、課題を地域と共有・提案、そして海外との交流スタート

【５年生　総合的な学習の時間　おくのの歴史や文化を継承しよう】

５年生は、地域の方から「おくのの歴史や文化を守ってほしい」と依頼を受け、「地域に昔から残る風習、行事、神社・仏閣を守り、受け継いでいくために、自分たちにできることは何だろう。」というテーマで活動を行った。まず、地域の風習行事、神社、仏閣を調べ、その中で特に金剛院と団子念仏に注目した。全校児童生徒や保護者にアンケートをしたり、歴史や文化を守る方法について考えたりした。そして、自分たちの考えた方法として、「キャラクターをつくって、校児童生徒や地域の人に金剛院・団子念仏を知ってもらう」として活動を進めた。

【５年生～海外との交流スタート】　本校では、児童生徒が世界的な視野で物事を捉えることができるように、2015年度より、海外の学校と交流を行っている。

現在は５年がオーストラリア、６年が台湾、７年がインドネシア、８年がリトアニア、９年がポーランドの学校と交流を進めている。

【６年生　総合的な学習の時間「アートマイル国際協働学習」】

本校の６年生は、アートマイル国際協働学習に参加している。2020 年度は、インドネシアのユネスコスクールの子供たちと交流を行った。交流を通して、様々なことを実感したり、学んだりした。また今回の交流では SDGs の視点だけでなく、世界的課題である新型コロナウィルス感染症もテーマとして取り上げ交流を進め、自分達の思いを協働活動を通して壁画作成という形で表した。

＜事前学習＞
交流に向け事前準備

＜出会い＞
英語で自己紹介から

＜共有から融合へ＞
相手の学校が新型コロナウィルスの影響で休校になったが、ZOOM で交流

＜壁画の作成＞
相手校との交流を通して共通のテーマのもと，自分たちの思いを壁画に

＜壁画が完成＞
国境超え協働で作成

＜さらに交流＞
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ大使館髙橋さんと

資料４ ｲﾝﾄﾞﾈｼｱのﾕﾈｽｺｽｸｰﾙとの交流の様子

④後期課程７～９年･･･課題を地域と共有･提案、地域社会との協働、持続可能な社会の担い手へ

【７～９年　後期課程学校行事「歩く会」】

後期課程では「Act locally」へと視点を戻し、「SDGs 目標 11 住み続けられるまちづくりを」につなげた学習を進めていく。まず、後期課程学校行事「歩く会」で、前期課程までに培った資質・能力を生かし、そして地域の方と共に改めて地域「おくの」を歩き、地域の課題を明らかにしていく活動を行った。

【前期課程から後期課程の学習へとつなげる】

前期課程の学習により、生徒たちの SDGs への意識は確実に高まっている。後期課程７年となり、「歩く会」で SDGs の視点で地域の現状を調べると、森林が多くを占め、放置林の増加や太陽光発電設備の建設が急速に進むという実状が浮き彫りとなった。その後、在インドネシア日本大使館一等書記官の髙橋さんから、SDG s が示す世界的な課題と地域おくのの関連についての講義を頂いた。そして、本校の ESD の活動拠点である古民家などで、自分達の地域の課題について考えた。

【７年生　総合的な学習の時間　地域「おくの」の課題について知る】

最初は、「森林の保持」か「太陽光発電設備」かのどちらを優先するのかについて検討していたが、考えが深くなるほど、次第に双方の共存を目指すことが地域を魅力あるものにすると共に、持続可能な社会へとつながるのではないかという考えが多数を占めるに至った。そこで、多くの学年が支援を受けている NPO 法人アサザ基金や、クリーンエネルギーを扱う企業、市役所環境政策課によるレクチャー等から多様な視点や考えから地域を捉える機会を得た。今後さらに発展させていく予定である。

（４）ESD の深化を目指した新たな取組

【6･7 年生によるアートマイル国際協働学習　座談会～ESD の深化を目指して～】

アートマイル国際協働学習に取り組んだ、6･7 年生による座談会が行われた。年々、ESD の取組が各

資料５　６・７年　座談会の様子

学年の教育活動に浸透し、義務教育学校化に伴い系統性も意識して取り組んでいるところである。

しかし、単独で SDGs の学習を進めている学年があったり、活動内容が異学年で重なってしまったりするという課題がある。そこで、前期課程と後期課程をつなぎ、更なる活動の深化を目指し、6・7 年代表による座談会が設定された。6・7 年がどちらも取り組んだアートマイル国際協働学習を踏まえ、海外の学校との交流を通して学んだことについて話し合いが行われた。話し合いの様子から、一人一人が SDGs を自分事としてとらえ、将来に対する願いをもち、自分から行動しようという態度が生まれており、「Think globally, act locally」を体現していると強く感じられた。今後、学年の縦の流れを意識した異学年活動や、異学年にも学習状況がわかるようにして、各学年の学習が一層深まるようにすることの必要性を確認した。

（5）ESD の学校全体へのつながり、広がり

ここまで述べた一連の ESD 推進のための教育活動は学校全体でつながり、様々な活動へ広がりつつある。ここでは、その一部を紹介する。

①ユネスコスクールコーナー

ユネスコスクールコーナーを設置し、本校の ESD・SDG s に関する取組について掲示している。まず、SDG s の実践計画掲示することで、どの単元の学習がどの SDG s の目標と関係しているのか、児童生徒が常に意識できるようにした。その他、委員会活動をはじめ ESD・SDG s に関する取組をコーナーに掲示するようにした。

②生徒会活動への広がり

資料６は、生徒会ポスターである。活動の主となる３メリット計画の中には、ユネスコスクールとして SDGs の取組が位置づけられている。生徒会役員が，前期課程１～４年の教室に出向き、SDGs について教えて、学ぶ機会の設定があった。コロナ禍のオンラインによる文化祭では、生徒会本部役員を中心に、SDGs の「目標２　飢餓をゼロに」の取組として全校で募金を行った。また、企画の一つとして、各委員会の SDGs に関する全校での取組が動画で紹介された。目的意識をもって SDGs を意識した活動が、各委員会活動としても広がっていることがわかる内容であった。

資料６　生徒会ポスター

③教職員研修を生かして

年度始めには、新しく本校に赴任した教職員に対して、そして１年間を通してどのように ESD を推進していくのか確認の意味も含めて ESD・SDG s の研修を行っている。学校全体についてだけでなく、学年ごとにも学年主任を中心に方針や流れを確認した。

また、６月には、在インドネシア大使館の髙橋さんによる ESD・SDG s 研修がオンラインで行われた。髙橋さんは、日本の ESD 発展に直接関わってきた方である。ESD・SDG s ・ユネスコスクールとの関係や、成り立ちや定着等について、直接聞くことで、更なる理解を深めた。そして、日々の実践の中での疑問についての Q&A の時間も設定され、貴重な研修となった。

さらに、夏期研修では、資料７のように、カリキュラム・マネジメント研修において、全教員でカリマネの意義や有用性を確認し、実際に視覚的カリキュラム表をもとにカリキュラム・マネジメントの可能性の見直しを行った。

そして、本校が推進している SDG s に関する取組も視覚的に見える化することで、９年間の系統的な学びがより効果的になるように、カリキュラム表に SDG s ｱｲｺﾝｼｰﾙを貼る活動も行った。各学年・各教科だけでなく、学校全体で教育活動の SDG s の関連性の確認により、ESD の取組をさらに充実させていく。

資料７　夏期教職員研修にて、視覚的ｶﾘｷｭﾗﾑ表に SDG s の見える化を検討している様子

④本校の取組を校外へ

近年、本校の ESD・SDG s の取組への問い合わせが増

えている。県研修センターの「SDGｓ研修講座」においても、本校の実践発表を紹介している。このように本校のESDは、校外にも広がりつつある。

３　成果と課題

(１)児童生徒のアンケート結果より

資料８の質問1、2の結果から、1～3年では、本校がユネスコスクールだと知る児童は少ない。一方、SDGｓという言葉は 88.2%が知っていることから、本校のESD・SDGｓの取り組みが広がっていること、さらには、低学年の活動のねらいが 93.3%と概ね達成できていることがわかる。また、4～9年生に対する質問4においては、学年が上がるにつれて系統的に育てたい力である項目③、④、⑧が50%に満たなかったことがわかる。発達段階によって活動のねらいが異なり、高めていく力も異なる。したがって、今後学年ごとのねらいに照らし合わせて分析し、次年度の活動につなげていく必要があると考える。また、質問5の結果より、後期課程生徒では、本校の一連のESDの取組により、視野が広がったり、考えが深まったりした生徒が81.8%であった。これは、「総合の時間の外国との交流を通して、世界について考えようと思うようになった。」「今までは SDGｓが何か知らなかったけど、学んでいくうちに取り組んでいきたいと考えるようになった。」という記述から、ESD の学習の中で培われたものであると言える。

1.本校が「ユネスコスクール」だと知っているか。	知っている 26.4%
2.「SDGｓ」という言葉を知っているか。	知っている 88.2%
3.ESDを通して、おくのの自然に触れたり、知ったりすることができたか。	できた 93.3%

（2021年12月、1～3年95人実施）

4.高まったと思う資質・能力はどれか。	
①美しいものや崇高なものに素直に感動する力	63.1%
②批判的に考える力	53.5%
③未来像を予測して計画を立てる力	48.7%
④多面的・総合的に考える力	41.2%
⑤コミュニケーションを行う力	63.1%
⑥他者と協力する態度	65.8%
⑦つながりを尊重する態度	67.9%
⑧進んで参加する態度	46.0%

（2021年12月、4～9年187人実施）

5.ユネスコスクールとして、総合的な学習の時間を中心としたSDGｓに関わる取組や海外との交流を通して、自分の視野が広がったと思うか	そう思う 81.8%

（2021年7月、7～9年91人実施）

（２）保護者学校評価アンケートより

質問内容	そう思う
1.学校は、ユネスコスクールとして、SDGｓに関する学習活動を積極的に取り入れている。	86.8%
2.学校は、環境教育と郷土教育等の充実に努めている。	90.9%
3.学校は、英語教育と国際教育の充実に努めている。	85.8%
4.学校は、ｺﾐｭﾆﾃｨｽｸｰﾙとして、教育活動や学校行事などに関して保護者や地域と連携・協力した教育活動に取り組んでいる。	85.8%
5.お子さんは地域や社会をよくするために、「自分自身に何ができるか」を考えたり、話したりすることがある。	46.7%

（2021年7月　保護者195人実施）

【資料９学校評価アンケート結果（一部抜粋）】

資料９の質問１～４の結果から、保護者に８５%以上と一定の評価が得られていることがわかる。しかし、５については課題であり、これは資料８の課題である資質能力③、④、⑧と関連が大きい内容である。今後も、これらの成果と結果を生かし、児童生徒の高めたい８つ資質・能力の向上を目指し、地域と連携を重ねながら、本校のESD・SDGｓの取組の改善を続けていきたい。

高等学校賞

広島県立広島国泰寺高等学校
教諭　永井理恵

ＳＤＧｓでつなぐ教科学習と探究活動

１　はじめに

本校は,明治10年開校の広島県中学校を前身とし,今年で創立144年目を迎えた全日制普通科高校である。「質実剛健」「礼節気品」「自治共同」を校訓とし，文武両道の剛毅な校風のもと，生徒・教職員ともども日々活気ある学校生活を送っている。

平成14年度から５次にわたるSSH指定を受け，理数コースを中心に自然や社会における諸現象を科学的視点から捉え，発見した課題を文献調査及び実地調査・実験を通して解決するという探究活動を深化させる中で，それらを理数コース以外の生徒にも波及させ,全校で「知識・技能」「課題発見・解決力」「批判的・論路的思考力」を伸ばしてきた。

一昨年度からは，将来世界で活躍できるイノベーティブなグローバル人材を育成するための文部科学省のワールド・ワイド・ラーニングコンソーシアム構築支援事業（以後ＷＷＬ構築支援事業）の拠点校として，国際交流，広島大学をはじめとした県内の大学との連携，文理融合型のカリキュラムの編成等，生徒に「知識・技能」「課題発見・解決力」「言語・コミュニケーション能力」「批判的・論理的思考力」「イノベーション」「オープンマインド」「グリット」等の資質・能力を身に付けさせるべく様々な取組を行っている。特に,今年の３月には国内フォーラムを，また７月には高校生による国際会議を開催し，県内の共同実施校，連携校，関係者の協力のもと，企画から運営に至るまで,生徒が主体となって取組を進めることができた。

変化が激しく先行きが見通せない社会にあって，地域・日本・世界のリーダーとなるべき人材の育成を目指して，これまでに展開されてきた教育活動は，生徒は大きく成長させていると考える。どのような時代になっても変わらない「国泰寺の伝統」を「不易」なものとして大切にするとともに,「Society5.0」の到来に向け，新たなこと・答えのない「問い」に果敢に挑戦する「流行」を求めていくことを基本に据えようとの認識のもと，教育活動全体で前述した７つの資質・能力を伸ばす取組を進めている。

２　実践内容

（１）経過

本校では，従来から総合的な学習の時間において課題発見･解決型の探究活動を行ってきたが，そのテーマは「生徒それぞれの興味・関心に応じたもの」という大きなくくりであった。いきおいその内容は一つの学問分野に収斂していく傾向にあった。

だが，現代社会が高度化・複雑化するにつれて，社会の抱える課題もまた多岐にわたる複雑なものとなり，学校現場は実社会とのコミットをより強く求められるようになっている。

この流れを受け，本校では総合的な学習の時間について次のようにリニューアルを行った。（表１）
ＷＷＬ構築支援事業の開始と重なったこともあり，この事業の３年間で「総合的な探究の時間」としてのカリキュラム完成を目指すこととした。

また学校設定科目として新たに「グローバル平和探究」（第２学年）を置き,「総合的な探究の時間」との相乗効果による生徒の資質・能力の伸長をねらった。

（２）学習活動

①「持続可能な社会づくり」との繋がり

人類が初めて原爆の災禍に遭った地にあり，その爆心地に最も近く位置する高等学校として「平和」で「持続可能な社会」は最も切実に希求するものである。それをふまえて，ＷＷＬ構築支援事業の目的を「グローバルな視野と強い使命感を持ち，持続可能な社会の構築や国際社会の平和と発展に貢献する人材の育成」と定め，この度の実践では

◇SDGｓの視点から「平和で持続可能な社会」を捉え，解決すべき課題を発見する。

◇課題の解決に向けた探究活動を行い，解決策とともに新たな価値の創造を試みる。

◇課題の解決策を様々な形態で発信する。

ことを実践の軸とした。

「平和で持続的な社会をつくるための　My　Project」	
第１学年（基礎）	現代社会の諸問題に関わる知識を獲得し，探究の方法を知る
	①「平和」とは　②新聞から学ぶ　③ミニプロジェクト（グループ）
	④大学×SDGs　⑤企業×SDGs　⑥行政×SDGs（外部講師による講義）
	⑦探究×SDGs（各自の探究テーマ設定）
第２学年（実践）	現代社会の諸問題から自ら課題を発見・設定し，探究活動を実践する
	①各自の設定した課題による探究活動 ②中間発表会及び外部TAからの助言 ③課題研究成果発表会（ポスター/スライドによる口頭発表）
第３学年（深化）	課題解決の過程を方法論として他の場面でも活用し，自己の夢につなげる
	①探究活動の成果を深化・論文化 ②類似のテーマで探究活動を行っている人同士で発表とグループ討議 ③各自の学びを振り返り，ポートフォリオ「学びの木」作成

第１学年②・③は令和元年度のみ新聞切り抜き作品制作，令和2・3年度は「新型コロナウィルス探究プロジェクト」
この他令和3年度は③にあたるところでSDGsに関わるカードゲームも実施した
理数コースは「科学的な基礎研究」が軸となるため，個々のプログラムは若干異なった進行となる

表１

②「総合的な学習（探究）の時間」の取組

「平和」を広い視野で捉え，SDGｓの観点から社会課題を解決するプロジェクトを考案し，その過程で学び得た事柄を明確にすることを全学年共通の目標として実施した。

第１学年では様々なメディアや人的リソースを活用して現代社会の課題を認識し，数名のグループによる探究活動を行う。活動の成果は各々の課題の解決策としてまとめ，それらをプレゼンテーション等の形式で発信する。（図１①②・２）これらの活動の中で「平和」を「狭義の平和」と「広義の平和」として再定義し，「持続可能な社会」をつくることが国際社会の平和と発展に繋がることを確認していく。（図３）

図1① ガイダンスの様子

図1②　講演会（企業×SDGs）

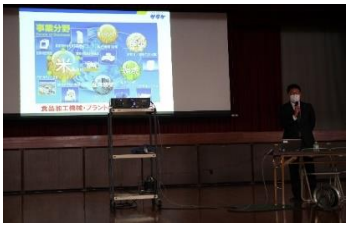
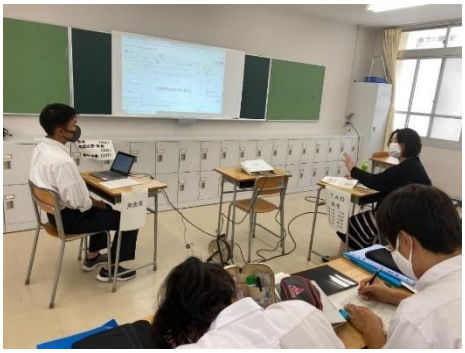


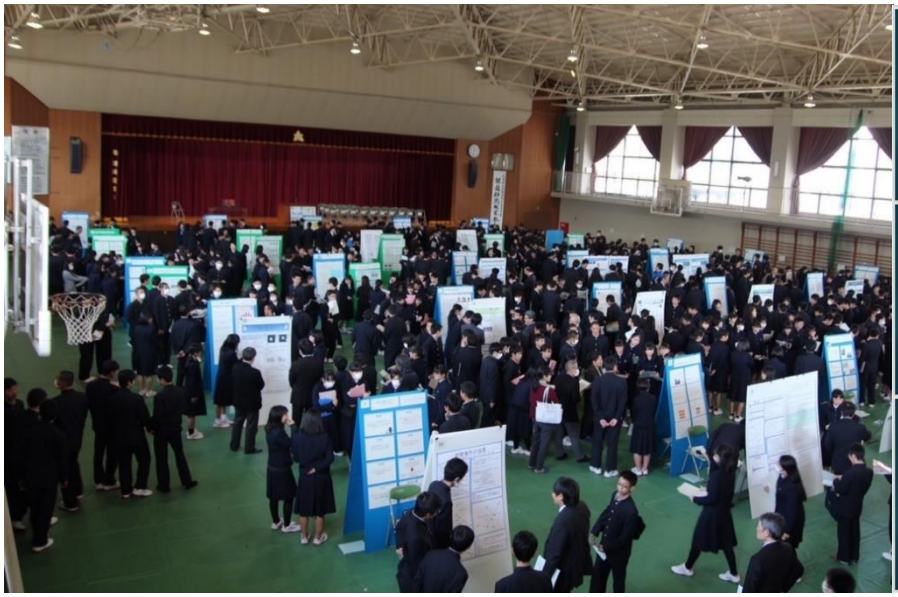
図2　プレゼンテーション

図3　令和3年度実施の SDGs カードゲームの様子

第２学年では第１学年で身につけた知識やスキルを活かして，個人が見聞きし得た社会問題（比較的身近なもの）から課題を設定し，それが SDGs の何と関連するかを意識しながら，その解決策を仮説検証の形で提案する。提案については，９月に中間発表会を行い，本校同窓生によって構成される社会人 TA からの助言を受けた後，（図４）年度末の課題研究成果発表会を実施する。従来の発表会は体育館で開催し，ポスター発表の形式であったが，（図５）コロナ禍の影響を受けた昨年度からはスライドを用いた口頭プレゼンテーション（図６①②）に切り替えている。

図4
中間発表会の様子
→





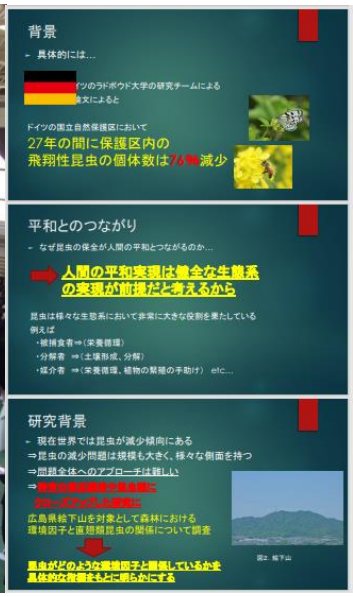


図5 体育館での発表会

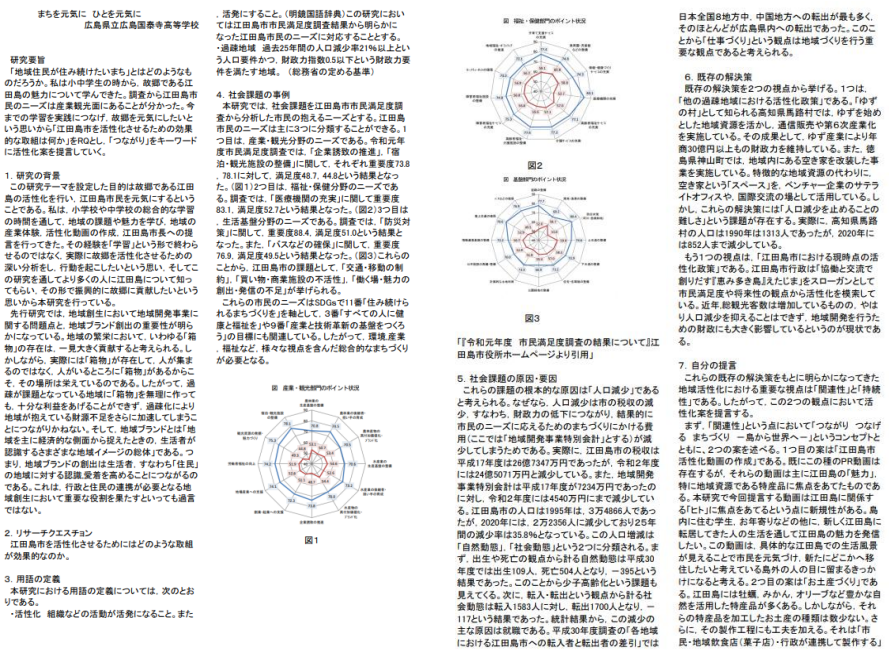
図6① 生徒作成スライド ↑

図6② 口頭プレゼンテーション

オンライン発表としても実施↓

第３学年では提案内容をブラッシュアップして4000 字程度の論文にする（図７）とともに，同じテーマで探究活動を行った生徒同士で議論する。(図８）最終的には３年間で学び得たことを「学びの木」と名付けた一枚のポートフォリオ（図９）にした。

図7 論文の一部(本年度3年生の作品)



まちを元気に ひとを元気に
広島県立広島国泰寺高等学校

研究要旨
「地域住民が住み続けたいまち」とはどのようなものだろうか。私は小中学生の時から，故郷である江田島の魅力について学んできた。調査から江田島市民のニーズは産業観光面にあることが分かった。今までの学習を実践につなげ，故郷を元気にしたいという思いから「江田島市を活性化させるための効果的な取組は何か」を中心とし，「つながり」をキーワードに活性化案を提言していく。

1. 研究の背景
この研究テーマを設定した目的は故郷である江田島の活性化を行い，江田島市民を元気にするということである。私は，小学校や中学校の総合的な学習の時間を通して，地域の課題や魅力を学び，地域の産業体験，活性化動画の作成，江田島市長への提言を行ってきた。その経験を「学習」という形で終わらせるのではなく，実際に故郷を活性化させるための深い分析をし，行動を起こしたいという思い，そしてこの研究を通してより多くの人に江田島について知ってもらい，その形で振興的に故郷に貢献したいという思いから本研究を行っている。
先行研究では，地域創生において地域開発事業に関する問題点と，地域ブランド創出の重要性が明らかになっている。地域の繁栄において，いわゆる「箱物」の存在は，一見大きく貢献すると考えられる。しかしながら，実際には「箱物」が存在して，人が集まるのではなく，人がいるところに「箱物」があるからこそ，その場所は栄えているのである。したがって，過疎が課題となっている地域に「箱物」を無理に作っても，十分な利益をあげることができず，過疎化により地域が抱えている財源不足をさらに加速してしまうことにつながりかねない。そして，地域ブランドとは「地域を主に経済的な側面から捉えたときの，生活者が認識するさまざまな地域イメージの総体」である。つまり，地域ブランドの創出は生活者，すなわち「住民」の地域に対する認識,愛着を高めることにつながるのである。これは，行政と住民の連携が必要となる地域創生において重要な役割を果たすといっても過言ではない。

2. リサーチクエスチョン
江田島市を活性化させるためにはどのような取組が効果的なのか。

3. 用語の定義
本研究における用語の定義については，次のとおりである。
・活性化 組織などの活動が活発になること。また，活発にすること。(明鏡国語辞典)この研究においては江田島市市民満足度調査結果から明らかになった江田島市民のニーズに対応することとする。
・過疎地域 過去25年間の人口減少率21%以上という人口要件かつ，財政力指数0.5以下という財政力要件を満たす地域。（総務省の定める基準）

4. 社会課題の事例
本研究では，社会課題を江田島市市民満足度調査から分析した市民の抱えるニーズとする。江田島市民のニーズは主に3つに分類することができる。1つ目は，産業・観光分野のニーズである。令和元年度市民満足度調査では，「企業誘致の推進」，「宿泊・観光施設の整備」に関して，それぞれ重要度73.8，78.1に対して，満足度48.7，44.8という結果となった。(図1)2つ目は，福祉・保健分野のニーズである。調査では，「医療機関の充実」に関して重要度83.1，満足度52.7という結果となった。(図2)3つ目は，生活基盤分野のニーズである。調査では，「防災対策」に関して，重要度88.4，満足度51.0という結果となった。また，「バスなどの確保」に関して，重要度76.9，満足度49.5という結果となった。(図3)これらのことから，江田島市の課題として，「交通・移動の制約」，「買い物・商業施設の不活性」，「働く場・魅力の創出・発信の不足」が挙げられる。
これらの市民のニーズはSDGsで11番「住み続けられるまちづくりを」を軸として，3番「すべての人に健康と福祉を」や9番「産業と技術革新の基盤をつくろう」の目標にも関連している。したがって，環境,産業，福祉など，様々な視点を含んだ総合的なまちづくりが必要となる。

図 産業・観光部門のポイント状況

図1

図 福祉・保健部門のポイント状況

図2

図 基盤部門のポイント状況

図3

『令和元年度 市民満足度調査の結果について』江田島市役所ホームページより引用

5. 社会課題の原因・要因
これらの課題の根本的な原因は「人口減少」であると考えられる。なぜなら，人口減少は市の税収の減少，すなわち，財政力の低下につながり，結果的に市民のニーズに応えるためのまちづくりにかける費用(ここでは「地域開発事業特別会計」とする)が減少してしまうためである。実際に，江田島市の税収は平成17年度は26億7347万円であったが，令和2年度には24億5071万円と減少している。また，地域開発事業特別会計は平成17年度が7234万円であったのに対し，令和2年度には4540万円にまで減少している。江田島市の人口は1995年は，3万4866人あったが，2020年には，2万2356人に減少しており25年間の減少率は35.8%となっている。この人口増減は「自然動態」「社会動態」という2つに分類される。まず，出生や死亡の観点から計る自然動態は平成30年度では出生109人，死亡504人となり，－395という結果であった。このことから少子高齢化という課題も見えてくる。次に，転入・転出という観点から計る社会動態は転入1583人に対し，転出1700人となり，－117という結果であった。統計結果から，この減少の主な原因は就職である。平成30年度調査の「各地域における江田島市への転入者と転出者の差引」では日本全国8地方中，中国地方への転出が最も多く，そのほとんどが広島県内への転出であった。このことから「仕事づくり」という観点は地域づくりを行う重要な観点であると考えられる。

6. 既存の解決策
既存の解決策を2つの視点から挙げる。1つは，「他の過疎地域における活性化政策」である。「ゆずの村」として知られる高知県馬路村では，ゆずを始めとした地域資源を活かし，通信販売や第6次産業化を実施している。その成果として，ゆず産業により年商30億円以上もの財政力を維持している。また，徳島県神山町では，地域内にある空き家を改装した事業を実施している。特徴的な地域資源の代わりに，空き家という「スペース」を，ベンチャー企業のサテライトオフィスや，国際交流の場として活用している。しかし，これらの解決策には「人口減少を止めることの難しさ」という課題が存在する。実際に，高知県馬路村の人口は1990年は1313人であったが，2020年には852人まで減少している。
もう1つの視点は，「江田島市における現時点の活性化政策」である。江田島市行政は「協働と交流で創りだす豊かな多様なたじまを」をスローガンとして市民満足度や将来性の観点から活性化を模索している。近年,総観光客数は増加しているものの，やはり人口減少を抑えることはできず，地域開発を行うための財政にも大きく影響しているというのが現状である。

7. 自分の提言
これらの既存の解決策をもとに明らかになってきた地域活性化における重要な視点は「関連性」と「持続性」である。したがって，この2つの観点において活性化案を提言する。
まず，「関連性」という点において「つながり つなげる まちづくり ―島から世界へ―」というコンセプトとともに，2つの案を述べる。1つ目の案は「江田島市活性化動画の作成」である。既にこの種のPR動画は存在するが，それらの動画は主に江田島の「魅力」，特に地域資源である特産品に焦点をあてたものである。本研究で今回提言する動画は江田島に関係する「ヒト」に焦点をあてるという点に新規性がある。島内に住む学生，お年寄りなどの他に，新しく江田島に転居してきた人の生活を通して江田島の魅力を発信したい。この動画は，具体的な江田島での生活風景が見えることで市民を元気づけ，新たにどこかへ移住したいと考えている島外の人の目に留まるきっかけになると考える。2つ目の案は「お土産づくり」である。江田島には牡蠣，みかん，オリーブなど豊かな自然を活用した特産品が多くある。しかしながら，それらの特産品を加工した お土産の種類は数少ない。さらに，その製作工程にもエ夫を加える。それは「市民・地域飲食店(菓子店)・行政が連携して製作する」

③「グローバル平和探究」の時間の取組

「グローバル平和探究」では，よりグローバルな社会課題にフォーカスして，その解決策を協働して考察・検討・発信することを目標に置いている。

具体的には年間を通して「環境問題」「都市・貧困問題」「人口問題」「食糧問題」「エネルギー問題」の５つを取り上げ，数名のグループに分かれて各々の単元で与えられた課題の解決策を検討する。次の図は「都市・貧困問題」単元計画の一部である。

（図 10）授業には複数教科の教員が T. T. であたる。

図9　ポートフォリオ例（本年度3年生分）

図 10　単元計画

1	地	地	Ⅱ 都市・貧困問題【導入】 世界の都市問題について BOPビジネスについて	地理B
10	英			英　語
11	理			理　科
12	地	地	Ⅱ 都市・貧困問題 世界の貧困問題について	地理B
	英			英　語
	数			数　学
	英	英	Ⅱ 都市・貧困問題 世界の貧困問題の現状 日本企業のBOPビジネスの取り組み	英　語
	地			地理B
	理			理　科

発信の際に使用する言語には英語が含まれ，外国人生徒との議論も想定している。次の図 11 は昨年度実施されたエネルギー問題をめぐっての英語によるディベートとその準備の模様である。

図 11　ディベートとその準備の模様

昨年度は広島大学留学生とオンラインでのディスカッションを実施したが，本年度はそれが難しいため，BOP ビジネスプランシートを作成してコンクールに応募した。その際作成したプレゼン用シートの一部を下に示す。（図 12①②）本年度は居住地域を異にする他校生（ふたば未来学園）と課題を共有しての交流学習も計画・実施した。（図 13①～④）

図 12①（下の3枚）

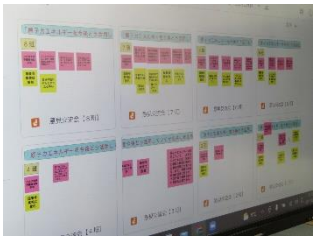
図 12②（下の3枚）

図 13①

図 13②

図 13③

図 13④



論題は「原子力エネルギーの活用」であった。ふたば未来学園とは平成 30 年度から一部生徒による課外の協働学習を実施しており，本年度初めて授業交流が実現したことになる。

3　成果と課題

今年本校はＷＷＬ構築支援事業拠点校としての最終年度を迎え，年度末には諸活動の総括を行う。ここまでの活動を通して「総合的な探究の時間」３学年分のカリキュラム，「グローバル平和探究」の年間計画はそれぞれ完成に近づきつつある。

本校では，「平和」を「狭義の平和」と「広義の平和」に分けて再定義し，「持続可能な社会」をつくることが国際社会の平和と発展に繋がることを確認した上で，「総合的な探究の時間」においては各自が見

聞きし得た比較的身近な社会問題から課題を設定し，それが SDGs の何と関連するかを意識させるようにした。一方「グローバル平和探究」では SDGs と明確に関連づけた所与の社会課題についてそれぞれ解決策を検討する過程で視野を広げ，グローバルな問題を手許に引き寄せることを試みた。この二つの活動によって生徒たちは「豊かさの分配と継承の問題」を「現実的に解決するため」に「自分がどう関わるか」という課題を見出したと考えられる。

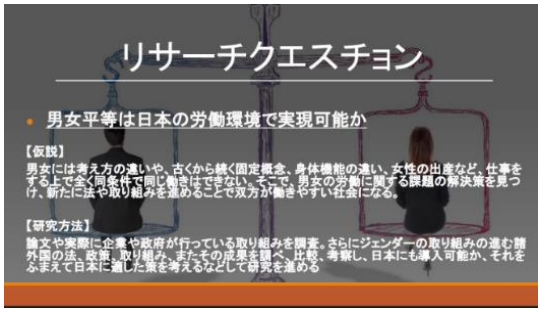
これらの課題に取り組む過程で生徒たちは次のような能力や態度を身に付けてきた。

1　課題となっていることについての正確且つ適切な情報を収集しようとする態度。
2　複数の情報を的確にまた批判的に読み取り，それらを組み合わせて新たな情報を引き出す能力。
3　現前する社会問題の本質をとらえ，解決策を真摯に考察しようとする態度。
4　既存の解決策を多面的・多角的に検討し，評価する能力。
5　既存の解決策の改善点をふまえて新たな価値を創造しようとする態度。
6　自分のアイデアを論理的な構成によって他者に的確に伝える能力及び開かれた議論を形成しようとする態度。

現在第２学年の生徒が作成中のスライドの内容にもそのことが窺える。（図 14①・②）

図 14①

図 14②



またこれらの能力や態度は次のような資質・価値観に繋がるものと思われる。

1　現状を的確に分析し，社会課題やその解決策を評価することができる。
2　自己の知見のみならず価値観をも相対化し，異なる文化的背景や価値観を持つ他者を受容し，議論することができる。
3　社会課題の解決を自らの問題と捉えて何らかの行動を起こすことができる。
4　地域間の公平を視野に入れつつ環境・経済・社会のバランスがとれた豊かさを目指そうとする価値観。
5　「平和で持続可能な社会」は現在のみならず将来世代においても実現すべき状況であり，その責任は各自が負うものであるという価値観。

「総合的な探究の時間」の現時点における課題は，どの学年においてもいかにして各自の具体的な行動につなげていくかということにある。特に核となる第２学年は各自の提言に対する社会人 TA の助言を受けて，その実践あるいは検証に入りつつある。論文作品として掲載した第３学年の事例はそのモデルの一つであり，こうした試みがより多くの生徒のものになるような「学び」を形成していきたい。

「グローバル平和探究」については現在５つめの問題（エネルギー問題）への取組を終えたところであり，生徒の眼は世界へと向けられつつある。
最終ステージでは各自が世界の中から選んだ地域の課題を解決する方法を考えることになる。

今後は，ここで学んだ内容が「総合的な探究の時間」の学びに転用・応用され，各々の提示するアイデアの中にその妥当性を担保する内容が付加できるようなマネジメントを行うこと，そして，「学び」を生徒たちが学内外での具体的な行動に繋げていく場をつくる工夫をしていきたい。

審査員特別賞

兵庫県立兵庫高等学校
教諭　岩見理華

学校全体で推進する SDGs の視点に基づく ESD 探究学習

１　はじめに

本校は「“次世代が選ぶまち”KOBE の実現－地域社会の未来を担い世界へはばたく実践者の育成－」を研究主題として、地域課題の探究と同時に正解のない国際的な課題を自分事として捉え、課題解決策を生徒自らが模索する取組を推進している。地域機関（大学、行政機関、団体・企業）と連携し、SDGs の視点に基づくテーマについて探究活動を行い、“ESD for 2030”に向けた永続的な教育活動ができるような体制を構築することを目指している。具体的には、地域（神戸市・兵庫県）の課題に対して生徒が地域機関の支援・協力を得て探究活動を行っている。全教育活動を SDGs に関連付けるとともに、STEAM 教育にも注力したカリキュラムを編成し、地域の課題に対して新たな価値を創造できる人材育成プログラムの開発に取り組んでいる。

２　実践内容

（１）普通科「総合的な探究の時間」（ひょうたん）

これまで創造科学科１クラス（40 名）および課外で活動するグローバルリサーチコース（各学年 30 名程度）が探究学習を実施していた。令和２年度より、普通科７クラス全生徒（約 840 名）においても新学習指導要領の「総合的な探究の時間」を先行実施することにより、SDGs の視点に基づく地域課題の解決に向けた探究学習に取り組んでいる。

①目標

本校の総合的な探究の時間（以下、ひょうたん）においては、（ア）SDGs のテーマに基づく教科横断的・総合的な学習を通じて知識を深め、幅広い視野を養い、（イ）地域の課題を自分事として捉え、その解決に向けて他者と協働する力を育成する。そして、（ウ）学習の成果をスライドやポスターにまとめて発表することを通して ICT 活用能力を高めるとともに表現力を養うことを目標としている。

②指導体制

令和３年度は、専任教員７名からなる「創造科学科推進部」及び「特色企画部」を校内組織として設置している。探究に係る教育活動については、創造科学科推進部・特色企画部専任 5 名、各学年担当（学年付）3 名、学年外担当 3 名の 11 名の教員で週に 1 度探究担当者会議を開催し、主に月曜日の６校時に開講している第２・第３学年のひょうたんのカリキュラムの検討を進めながら授業を実践している。

②各学年の取組

〔第１学年〕

全学年 320 名を対象に、国内外で活躍する外部講師によるキャリアデザインや学問分野研究、探究学習の手法や SDGs のテーマに関する講演会を課外で実施している。また、令和３年度は、授業内で「モビリティの調和」をテーマとして５人１班になり、工業社会や情報社会に続く未来社会の概念である「Society5.0」の実現に向け、モビリティー（移動手段）の課題や改善策を考えた。

〔第２学年〕

本校は、令和２年度より２年間兵庫県 NIE 推進協会の実践校として、春と秋２か月間ずつ６紙（朝日、産経、日経、毎日、読売、神戸）の新聞の提供を受けており、研究テーマの発見や関連する知識の習得に新聞記事の活用を位置付けている（写真１、２）。

写真１　SDGs 付箋を使った新聞ワークショップ

写真２　新聞ワーク（グループディスカッション）

また、記者派遣プログラムを利用して、調査内容をまとめる手法について学ぶ機会としている。1 学期の活動では、研究テーマ設定（表 1）に向け、前述の新聞の活用とともに、SDGs と地域の課題を結び付けて考えるための講演会を企画・実施した。2 学期以降は、研究グループごとにテーマを絞り込み、文献調査や、アンケート、インタビューなどのフィールドワーク、実験等を行って２月にスライドを用いた中間発表を行った。

表１　本校が分類している SDGs に基づく研究テーマ

A　貧困と飢餓　B　健康と福祉　C　教育とジェンダー平等　D　水　E　エネルギー F　持続可能な経済　G　まちづくり　H　自然環境　I　平和と公正　J　パートナーシップ

〔第３学年〕

令和２年度、新型コロナウィルス感染症の影響による休校措置等に対応するため、国の GIGA スクール構想と同様に高校における大規模な ICT 教育環境整備が、兵庫県では「県立学校学びのイノベーション推進事業」として急速に進められた。本校においても、164 台の教育用タブレット端末と全普通教室に大型提示装置が配備され、２つの教育用クラウドサービスのアカウントが全生徒に付与されたことで、昨年度２月の中間発表は、パワーポイントスライドを用いて行った。

７月の完成発表は、全 69 班がクラウド上のアプリケーションと各グループ 1 台のタブレット端末と個人のスマートフォンを用いてポスターを作成し、講堂を含めた 24 会場にて発表を行った（写真３、４）。第２学年の生徒もオーディエンスとして参加した。表２に各研究分野のテーマの例を記載する。２学期以降は、探究活動の振り返りを行った後、２年生のテーマ設定についてアドバイザーとして発表会（９月）への参加をはじめ、SDGs のテーマを扱った英語のリスニングおよびリーディング活動に取り組んだ。

写真３　タブレット端末とスマートフォンを用いたグループ探究活動

写真４　発表会の様子

表２　SDGs に基づく分野における研究テーマ
（全 69 班の一部抜粋）

〔A 貧困と飢餓〕	「長田の食料廃棄と食料の有効活用」「長田区のホームレスを救うには」
〔B 健康と福祉〕	「神戸市と世界の予防接種の差から考える予防接種率を上げる方法」
〔C 教育とジェンダー平等〕	「女性の産後職場復帰－オリンパス株式会社から見た神戸市の支援制度－」
〔D 水〕	「神戸市の水道管敷設における予算削減の提案」「部室等一階の水際対策」
〔E エネルギー〕	「木質バイオマス発電の兵庫県での活用」「兵庫県内でのバイオガス発電の推進」
〔F 持続可能な経済〕	「神戸市営地下鉄の西神中央駅の活性化について」「神戸のお土産で経済発展」
〔G まちづくり〕	「神戸市における地区間の整備格差」
〔H 自然環境〕	「神戸市が生ゴミ排出量 3 位?!－家庭と社会での問題と解決策－」
〔I 平和と公正〕	「募金について－ルミナリエ募金から学ぶこと－」「虐待の原因と解決法」
〔J パートナーシップ〕	「ふるさと納税による神戸市財政への影響」

③課外における活動

令和２年３月、新長田若松公園鉄人広場において、KOBE 鉄人化 PROJECT 主催「第 10.1 回長田区・高校生鉄人化まつり」が開催された。2010 年度に地域の活性化を目的に、長田区が実施した「第２回鉄人まちづくりイベント」に応募した創造科学科の前身である総合科学類型１期生の提案が最優秀賞を受賞したことから、それ以来、長田区に所在する高校と協働して実施されるようになった。これまで、創造科学科２年生

４名と育英高等学校の生徒会、神戸野田高等学校の生徒会と実行委員会を組織し、企画・運営を行ってきた。令和元年３月に実施予定であった「第 10 回長田区・高校生鉄人化まつり」は新型コロナウィルス感染症拡大に伴う休校措置により中止となった。その後、鉄人広場に「鉄人スクウエア」が設置され、その活用について公募があり、本校生徒の企画が採用された。今回は、実行委員長を神戸野田高等学校と本校生徒が共同で担うこととなった。第 10 回を引き継ぎ「RE:鉄人とつくるキセキ」というテーマを設定し、本校からは書道部、ギターアンサンブル部、吹奏楽部が出演した。天候にも恵まれ、すべてのプログラムを実施することができた（写真５）。

令和３年度も、令和４年３月末の実施に向けて実行委員会を中心にプログラムの企画等、準備を進めている。

写真５　「長田区高校生鉄人化まつり」

３　成果と課題

（１）活動において「持続可能な社会づくり」に向けて見出した課題

生徒たちは、探究活動を通して自分の住む地域の抱える課題について知らなかったり、これまで特に気にとめていなかった課題に気づいたりすることができた。SDGs は、遠い世界の大きな課題のように思われがちであるが、ミクロな視点で見ると、自分たち高校生でもできる解決策を見出すことができる。自分たちには関係ないと目を背けるのではなく小さなことでも何か自分たちにできることはないのかを考えてもらいたいと思う。活動で学んだ問題を論理的に考え、解決への筋道を立てて考える力や適切な情報を見抜く力の必要性など多くのことを学んだ。このことを踏まえてこれから社会に出ていく時の土台とし、自分のステップアップに繋げていってもらいたい。

（２）課題解決のために身に付けた生徒の能力や態度

世界規模の大きな問題を地域社会の課題に関連させて考えるプロセスを通して、問題を発見する力が身に付いた。リサーチの段階では、様々な情報から必要かつ重要な情報を取捨選択する情報収集能力を獲得することができた。また、グループで協働する活動を通して、多面的思考力や複眼的思考力、批判的思考力が身に付いた。課題解決策の提案を行うことによって創造的な思考もできるようになった。調べたことを文章にまとめ、スライドやポスターを作成して発表することによって自己表現能力も高めることができた。活動では、様々な場面で ICT を使う機会が多くあり、情報スキルも向上した。

（３）活動を通して育成した資質や価値観

活動を通して育成できたのは「当事者意識」である。生徒たちは、「社会において大きな役割を果たしていくのは大人だ」と感じていたが、実際に自分たちも地域社会に参画していくなかで、高校生だからこそできる、高校生ならではの視点から働きかけができることに気づくことができた。自分たちの考えに対して地域の方が真摯に向き合ってくれる姿を見て、「自分も社会の一員なんだ」という実感と共に責任感が芽生えた。活動の企画段階では、当事者意識を持って前向きに考えられていたが、実践活動が忙しくなるとその意識が薄れてしまった生徒もいた。当事者意識をもって行動するとしないとで活動の成果に差が出ることを認識することができた。

（４）活動を終えての課題や今後の展望

生徒を対象とした意識調査の結果から、本校の様々な ESD 活動が、生徒の社会の諸課題を解決するリーダー像を明確にし、自身の意識を高めていることが推察される。今後は、実施した活動ごとに評価を検証して改善を図る必要があり、そのための共通評価フォーマットの開発が急がれる。また各活動で実施している調査結果や論文、発表等のパフォーマンス評価との連関分析についても検討する必要がある。また、昨年度より実施している普通科の「総合的な探究の時間」をさらに充実させると共に各教科の授業においても特定の課題について討論したりリサーチを行って発表したりするといったアクティブ・ラーニングの手法を導入したプロジェクト型学習のカリキュラム開発に取り組みたい。

第 12 回 ESD 大賞
受賞校実践集

発行日：令和 4 年 3 月 10 日
発行：NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム
http://www.jp-esd.org
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-40
Tel :03-3295-7051
Fax :03-3295-7054
E-mail : info@jp-esd.org